

松虫

前

ワキ 市人

シテ (男) 客人

ツレ (同) 同じく

後

ワキ 前に同じ

シテ 亡霊

地は 摂津

季は 九月

ワキ詞

「是は津の国阿部野のあたりに住居仕る者にて候。
我此阿部野の市に出で、酒を売り候ふ所に。何く
とも知らず若き男の数多来り酒を飲み。帰るさ
には酒宴をなして帰り候。何とやらん不審に候ふ
間。今日も来りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋
ねばやと存じ候。

シテ、ツレ次第

「もとの秋をも松虫の。く。音にもや友を忍ぶら
ん。

シテサシ

「秋の風更け行くまゝに長月の。有明寒き朝風に。

シテ

「袖触れ続く市人の。伴なひ出づる道の辺の。草葉
の露も深緑。立ち連れ行くや色々の。簑代衣日も
出でゝ。阿部の市路に出づるなり。

下歌

「遠里ながら程近き。こや住の江の浦伝ひ。

上歌

「汐風も。吹くや岸野の秋の草。く。松も響き
て沖つ波。聞えて声々友さそふ。此市人の数々に。
我も行き人も行く。阿部野の原はおもしろや。

く。

ワキ「伝へ聞く白楽天が酒功賛を作りし琴詩酒の友。今も知られて市屋形に。樽をすす盃をならべて。寄り来る人を待ち居たり。

詞「如何に人々酒召され候へ。

シテ「我宿は菊売る市にあらねども。四方の門辺に人さわぐと。よみしも古人の心なるべし。如何に人々面々に。靈酒を汲みてもてなし給へ。

ワキ「又彼人の来れるぞや。

詞「今日はいつより酒をたゝへ。遊樂遊舞の和歌を詠じ。人の心を慰め給へ。早くな帰り給ひそとよ。

シテ「何我を早くな帰りそとよ。

ワキ「中々の事暮過ぐるとも。月をも見捨て給ふなよ。シテ「仰せまでもなし何とてか。此酒友をば見捨つべき。古き詠にも花のもとに。

ワキ「帰らん事を忘るゝは。

シテ「美景によると作りたり。

二人「樽の前に酔をすゝめては。是れ春の風ともいへり。

地「今は秋の風。暖め酒の身を知れば。薬と菊の花の

もとに。帰らん事を忘れ。いざや御酒を愛せん。

たとひ暮るゝとも。く。夜遊の友に馴衣の。袂

に受けたる月影の。うつろふ花の顔ばせの。盃に

向へば。色も猶まさり草。千年の秋をも限らじや。

松虫の音も尽きじ。いつまで草のいつまでも。変

はらぬ友こそは。買ひ得たる市の宝なれ。く。

ワキ詞

「如何に申し候。唯今の言葉の末に。松虫の音に友を忍ぶと承り候ふは。如何なる謂にて候ふぞ。

シテ詞

「さん候それに付いて物語の候ふ語つて聞かせ申し候ふべし。

ワキ

「さらば御物語り候へ。

シテ

「むかし此阿部野の松原を。ある人二人連れて通りに。折節松虫の声おもしろく聞えしかば。一人

の友人。彼虫の音を慕ひ行きしに。今一人の友人。
やゝ久しく待てども歸らざりし程に。心もとなく
思ひ尋ね行き見れば。彼者草露に臥して空しくな
る。死なば一所とこそ思ひしに。こはそも何と云
ひたる事ぞとて。泣き悲しめどかひぞなき。

地「其まゝ土中に埋木の。人知れぬとこそ思ひしに。
朽ちもせで松虫の。音に友を忍ぶ名の。世に漏れ
けるぞ悲しき。今も其。友を忍びて松虫の。く。

音に誘はれて市人の。身を変へて亡き跡の。亡霊
こゝに來りたり。恥かしや是までなり。立ちすが
りたる市人の。人かげに隠れて。阿部野の方に歸
りけり。く。

ロング地「不思議やさては此世にも。なき影すこし残しつゝ。
此程の友人の。名残を暫し留め給へ。

シテ「折節秋の暮。松虫も鳴く物を。我をや待つ声なら
ん。

地「そも心なき虫の音の。我を待つ声ぞとは。誠しか
らぬ言葉かな。

シテ「虫の音も。く。忍ぶ友をば待てばこそ。言の葉
にもかゝるらめ。

地「実にく思ひ出だしたり。古き歌にも秋の野に。

シテ「人松虫の声すなり。

地「我かと行きて。いざとぶらはんと。思し召すか
人々。有難や。是ぞ誠の友を。忍ぶぞよ松虫の。

音に伴なひて帰りけり。虫の音に連れて帰りけり。

(中人)

ワキ歌「松風寒き此原の。く。草の仮寐のこととはに。

御法をなして夜もすがら。彼跡とふぞ有難き。

く。

後シテ「あら有難の御弔ひやな。秋霜に枯るゝ虫の音聞け
ば。閻浮の秋に帰る心。猶郊原に朽ち残る。魄霊
是まで来りたり。うれしく弔ひ給ふ物かな。

ワキ「はや夕影も深緑。草の花色露深き。其方を見れば
人影の。幽に見ゆるは有りつる人か。

シテ詞「中々なれやもとよりの。昔の友を猶忍ぶ。虫の音
ともに顕はれて。手向を受くる草衣の。

ワキ「浦は難波の里も近き。

シテ「阿部の市人馴れくゝて。

ワキ「弔ふ人も。

シテ「弔はるゝ我も。

ワキ「いにしへ今こそ。

シテ「かはれども。

地「故郷に。住みしは同じ難波人。住みしは同じ難波
人。蘆火焼く屋も市屋形も。かはらぬ契りを忍草
の。忘れ得ぬ友ぞかし。あらなつかしの心や。

地クリ「忘れて年を経し物を。又いにしへに帰る波の。何
はの事のよしあしも。実に隔てなき友とかや。

シテサシ「朝に落花を踏んで相伴なつて出づ。

地 「夕べには飛鳥に従つて一時に帰る。

シテ 「然れば花鳥遊樂の瓊筵。

地 「風月の友にさそはれて。春の山辺や秋の野の。草葉にすだく虫までも。聞けば心の友ならずや。

クセ 「一樹の陰の宿りも。他生の縁と聞く物を。一河の流れ汲みて知る。其心浅からめや。奥山の。深谷の下菊の水。汲めども汲めどもよも尽きじ。流水の盃は。手まづさへぎれる心なり。されば廬山

のいにしへ。虎溪を去らぬ室の戸の。其戒めを破りしも。志を浅からぬ。思ひの露の玉水の。けいせきを出でし道とかや。

シテ 「それは賢き古への。

地 「世もたけ心さえて。道ある友人の数々。積善の余慶家々に。普く広き道とかや。今は濁世の人間。ことに拙なき我等にて。心もうつろふや。菊をたゝへ竹葉の。世は皆酔へり。さらば我ひとり醒めも

せで。万木皆紅葉せり。唯松虫の独音に。友を待ち酔ひをなして。舞ひ奏で遊ばん。

シテ「盃の。雪を廻らす花の袖。（舞）」

ワカ「おもしろや。千草にすだく虫の音の。」

地「機織る音の。」

シテ「きりはたりちやう。」

地「きりはたりちやう。つゞりさせてふ蚕蛹。色々の色音の中に。わきて我忍ぶ松虫の声。りんくり

んくとして。夜の声めいくたり。

地「すはや難波の鐘も明方の。あさまにもなりぬべし。」

さらばよ友人名残の袖を。招く尾花のほのかに見えし跡絶えて。草茫々たる朝の原に。く。虫の音ばかりや残るらん。く。